

## 分離派建築会の展開 ー新しい都市と社会をめざして

### 表現から構成へー川喜田煉七郎におけるリアリティの行方

梅宮弘光／神戸大学大学院

芸術家が創造に向かうとき、いったん現実生活から身を退き、自己の内面世界に沈潜して、そこで経験するさまざまな感情にかたちを与えようとする。川喜田煉七郎（1902-75 年）の活動も、そのように始まった。作曲家・山田耕筰が書いた奇妙な音楽ホールの話に基づいて描かれたドローイング「霊楽堂」（1926 年）である。川喜田はこれを、公募を始めた分離派建築会第 6 回展（1927 年 1 月）に応募し入選する。堀口捨己には「情感の籠つた非常に真摯な雄作」と賞された。当時、こんな荒唐無稽な構想を受け入れるのは、分離派建築会だけであった。

ここから川喜田のモダニズム建築運動が始まる。分離派建築会第 7 回展応募、自ら主宰した A S 建築会、創宇社主催の無選共同展参加。この過程で彼が発表した作品の外見には変化が見られる。情動に任せたフリーハンドは影をひそめ、抑制の効いた直線に光や空気や人の流れを示す矢印が加えられる。しかし、いかに実現可能性を装おうとも、荒唐無稽なアンビルトであることに変わりはない。このときの彼は、相変わらず自己の内面世界のなかにいる。そのなかで、リアリティを求めてもがいているのである。

もはやアンビルトでは運動が立ちゆかないことは明白だった。転機は新興建築家連盟の結成・解散（1931 年）である。これ以降、川喜田は建築構想を一切やめた。かわって始められたのは、バウハウスの予備課程に倣った「構成教育」であり（1932 年）、そのあとに始まる店舗能率研究である（1935 年～）。それは、内面世界に沈潜するのではなく、現実のリアルから新たな別の現実を構成する営為だった。

川喜田のこの転位は、しかし、分離派建築会への当初の憧憬なしには生じ得なかった。その後の彼を駆動したのは、自身の内に最初に抱え込んでしまった分離派的なものに対する反発にほかならない。同種の磁極が退け合うごとくである。

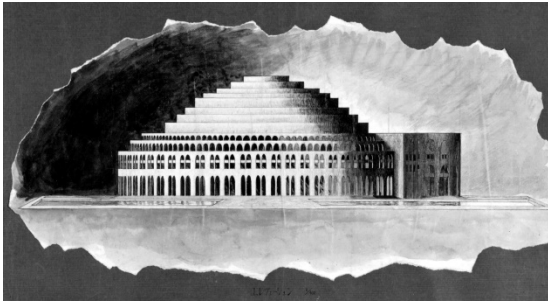


図1 霊楽堂の草案 1924年 頃川喜田煉七郎

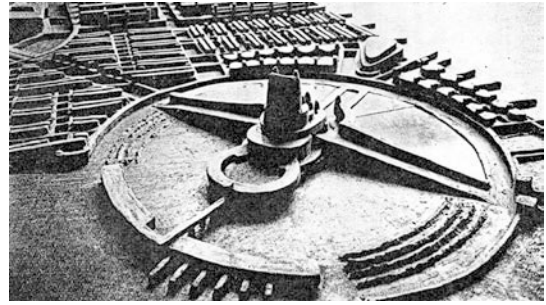


図6 浅草改造案 1984年 頃川喜田煉七郎

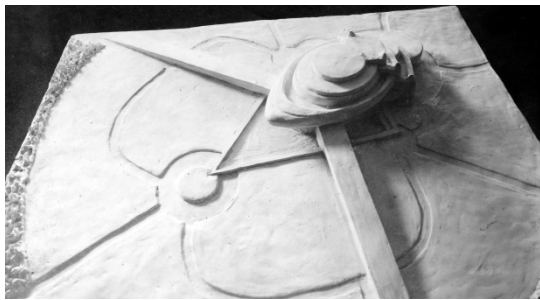


図2 霊楽堂 1926年 頃川喜田煉七郎

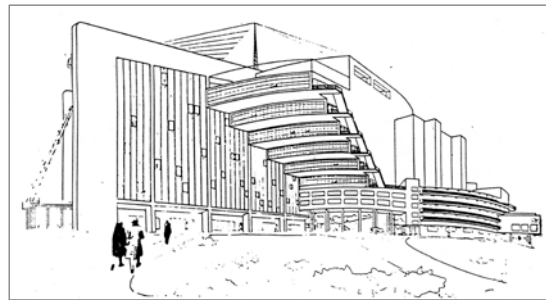


図7 ウクライナ劇場国際設計競技応募案 1930年 川喜田煉七郎

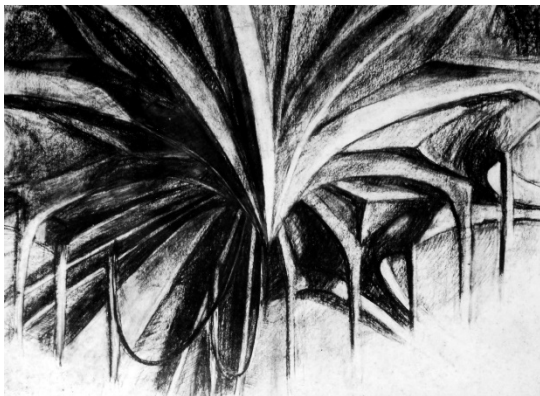


図3 霊楽堂 内部天井



図8 川喜田煉七郎による構成教育講習会 (和歌山師範学校, 1932年12月25-30日)

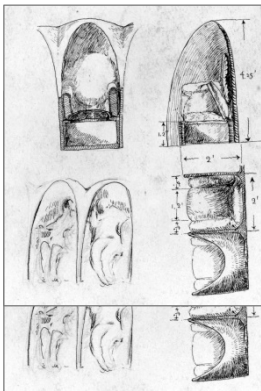


図4(左) 霊楽堂の草案 超集積座席



図5(右) 霊楽堂 超集積



図9 大衆和菓子の店「日本橋」130年代後半期 川喜田煉七郎